第四卷　十月號

婦人運動

職業婦人社發行

大正十五年九月二十七日印刷納本　十月一日發行

高群逸枝氏著

戀愛創生

（五版出來）

四六判六百頁布製
定價二圓八十錢
送料二十錢

一名 戀愛創世記

■過去の日本の思想家の何人が、斯ういふ立派な體系を示し得たか、近時まれに見る天分の豐な發露である。（――上里春生）

■この書の中には女性の無意識の寶庫からこぼれ落ちた眞理の片鱗がダイヤモンドのかけらのやうに文字の砂の中に閃めいてゐる。（――平塚らいてう）

■著者はやはり女流第一人者だと思ふ。（――加藤一夫）

■天才的女性の半生に泉む清冽な一大述作、創新な戀愛論（――讀賣新聞）

本書何を語る！見よ此の世評！

高群逸枝氏著 東京は熱病にかゝつてゐる（長篇詩）定價壹圓九十錢・送料十五錢

發行所 東京神田錦町三 振替東京二九六三九 株式會社 平凡社

十月號

婦人運動

目次

執筆者の紹介

時評を書いて頂いた石川三四郎氏は、社會運動史の著者として有名ですが、渡歐中長く農民の生活をしてゐられ、歸朝後は農民問題に就いても盡してゐられます。「朴烈問題」にしろ、下田氏の「學生の檢擧事件」にしろ、私たち婦人の生活には直接の關係はないことだと聞き流してはゐられない、いろ〳〵の意味を持つた問題だと思ひます。

高群逸枝氏から「らいてう、やす子兩氏の論爭を評す」る原稿を貰つて既に組上げたのであるが都合でのせられなくなつた。ぜひ讀んで貰ひたいと思ふから來月號にのせる。

伊福部隆輝氏は新聞や、雜誌でおなじみの深い文藝評論家、山田清三郎氏はプロレタリア作家としてすでに重きをなしてゐる方です。

長岡安太郎氏は、協調會にあつてもつぱら消費組合に關する研究と調査に没頭してゐられ方で、これからも色々有益な材料や、忠言を寄せて下さる筈です。

川嵜夏子氏の工場視察の報告を載せられたことは私たちの大きな自慢です。教育家ちうでの新思想家としても氏は有名です。

山本和子氏は、フエビアル協會に屬して早くから社會運動、産兒制限運動に熱心に働いてゐられた大宅和子氏の更生です。

創作の獎いつ子氏は、高津正道氏の夫人、新しく婦人界が生み出した作家として評判のいゝ方です。

編輯室にて

十月號から編輯の上に思ひ切り馬力をかけていゝものにしやうと思つてゐたのだけれど、大したことも出來なかつたのを殘念に思ふ。

秋を迎へて、今まで暑熱のためにぐつたりしほれかへつてゐた草や人やでも息を吹きかへして、活き々々した力を示してくれるのに、肝心の奥氏が九月早々からブラ〳〵と健康すぐれずにゐたことが何よりもこたえた。

◇

然し、もう元氣になつたから大丈夫だ。今月號ではまにあはなくて報告も出來ないでしまつたが、秋と共に私たちもいろ〳〵の問題で世に訴へ、なみさんと一緒に是非やりたいものだ、いや何としてもやらなくつちやならぬ、と思つてゐる事が澤山にある。どうぞ力を添へてほしい。

◇

今、非常に不景氣だといふことをよく私たちは聞く。實際、社會はいま各方面ともに餘程切迫した事情の下に苦しんでゐるらしい。この間で私たちの仕事がとにかく、打倒されもしないでつゞけられて來たばかりでない。とにかく同じ氣持で一緒にやつてゆかうといふ人が殖えて行つてゐるのは、何よりの私たちの自慢である。

◇

女のやつてゐる仕事を、女同志がもう少し助け合つたらよささうなものだ、といふ事を私たちは屢々人から聞く。ほんとにさうだ、私たちのこの仕事だつて、女の中からもう少し有力者が出て勵まして呉れたら、どんなにいゝだろう、と、あれもこれもとしたいと思ふ仕事が山程有るにつけても沁々とさう思ふ。

社會の事情は今や、私たちのこの仕事を非常に必要としてゐる!

◇

それにつけても、誌代を早くどし〳〵拂込んでほしい。

印刷所の都合により十月號の發行が意外におくれた事をお詫びいたします

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部 貳拾五錢（郵税五厘）
半年分 壹圓四拾錢
壹年分 貳圓八拾錢

送金法

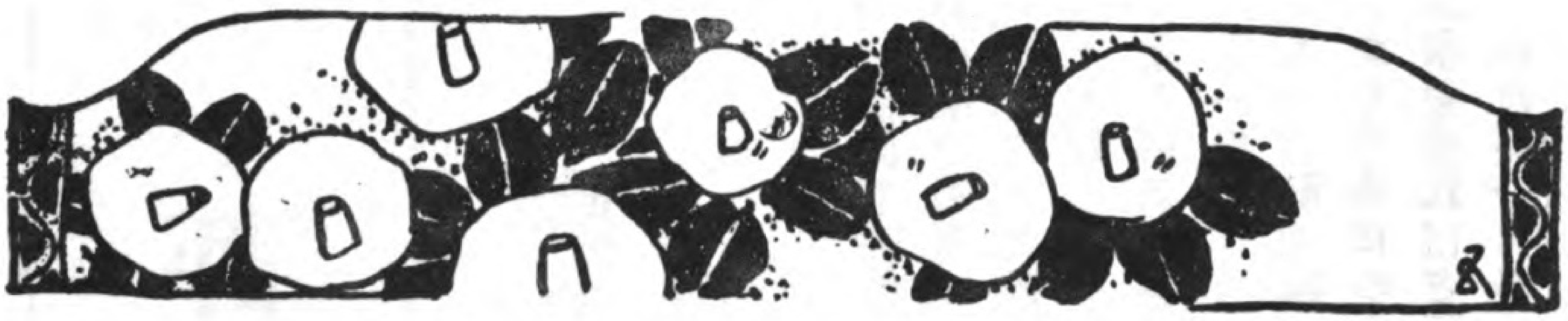
誌代は必ず前金の事
送金は振替が一番便利です
誌代の受取證は別に出しません
雜誌發送を以てこれに代へます

大正十五年九月廿八日納本
大正十五年十月一日發行

發行編輯兼印刷者 奥むめお
東京市外蒲田町女塚二四七番地

印刷所 京濱印刷所
東京府蒲田町北蒲田六九五番地

發行所 職業婦人社
東京市外蒲田町女塚二四七番地
振替東京六四〇一六番



卷頭言

「良妻賢母」主義の破綻

最近の新聞紙が傳へるところに依ると、處女會の、全國的統一計畫に際して、その標語として內務省が撰んだ「良妻賢母」主義に對して、文部省が今更、そんな標語でもあるまいと、異議を唱へたために、この事業は行惱みの狀態でゐるといふのである。

十年一日の如く、いや百年一日の如くに我が女子教育の根本モットーとなつてゐた良妻賢母主義に御本山の文部省が橫槍を入れるやうになつたといふことは、時勢の然らしむるところとは云へ、大きな驚異と云はなければなるまい。

賢母であり良妻であることが、惡い事でなく、いゝ事であるに違ひないことは云ふまでもない。が、いはゆる良妻賢母主義の教育が我國の女子に與へたものは何んであつたらう。

女子を一個の人間として教育しやうとはしないで、頭から良妻であれ、賢母であれと叩き込んだ結果は、必然的な結果として封建的女性觀に基く、女子を重寶な家庭の器具としての世界に押しこめてしまつたではないか。

さうした意味で、今までのやうな所謂良妻賢母主義の教育は實に一種の殺人教育であると云はなくてはならぬ。

とにかく、おそまき乍らも文部省がこの點に氣づいたのだとしたら、それだけでも、女子教育の前途、大慶至極と云ひたい。

時評

石川三四郎
下田將美

怪寫眞事件

石川三四郎

朴烈文子の怪寫眞事件といへば、論じ古るされた問題である。それが未だに政治家達の間には大問題になつてゐるから、馬鹿々々しくはあるが、婦人方の爲に、ちよと愚見を述べさせて貰ふ。

政治といふもの、政治家といふものが、如何に愚かしき事にのみ沒頭してゐるかといふ事を是れほど能く明白に證據立てゝくれた事件は多くあるまい

私は此之件に就き、九月六日の萬朝報に次の如く書いた。

「政治家の愚劣さといふものも、此頃の論爭の痴態に至つ呆てはれるの外はない。殊に今度の怪寫眞事件の如き、政本兩黨の態度といひ、又、それに對する政府の處置といひ、何といふ不見識、何といふ無誠意であらう……朴烈夫妻の寫眞が「怪」だといふ何故に怪だらう。あの寫眞は立派な夫婦愛を表はした寫眞であると私には思はれる……。私は昨夜初めて、あの寫眞を見て今更驚かざるを得なかつた。それは、あの寫眞其ものに驚いたのではない。あの寫眞を問題にして騷ぐ政治家といふものゝ如何にも愚劣なこと……に驚いたのである。…私は最初朴烈夫妻抱擁の「怪寫眞」と聞き、多分兩人接吻の寫眞なるべしと想像し、それならば今日の僞善な社會では問題になるであらうと考へた。然るに何ぞ測らん、怪寫眞は、夫婦が同じ椅子に倚りかゝり、文子は書見の姿勢を爲し、何等卑猥な姿態も存せず、美しい夫婦愛の莊嚴を發揮したものであつた。」

次で九月十九日の萬朝報に更に次の如く書いた。

「復興局の疑獄、松島遊廓問題、機密費事件是等は實に國民精神の上から、社會生活の上から、看過すべからざる重大であるに拘はらず、政黨者流から見れば何でもないのだ。否、實を言へば餘りに何でもあり過ぎる故に、何でもない、と衒はざるを得ないのだ。脛に傷もつ政黨屋さん達は、是等の事件

をあらだてると、何れも自分達を危くする。其恐ろしい影が、身に迫るのを思ふ時、彼等は戰慄して口を緘せざるを得ないのである。けれども一日も早く現内閣を倒して政權を握りたい。或は政變によりて一儲けしたい。或はただ事を起して些かの漁夫の利にありつきたい。そこで好題目として朴烈事件が選ばれた。……抑も、恩赦奏請に至つては、今の頑迷なる内閣が行へる唯一つの善事なりと私かに稱讃したことである………國君は人の罪を憎めども其人を憎まない。恐ろしい罪に赴くまでには、又同情すべき境遇の支配があるのだ。と憐れむべき境遇に同情して君主の恩赦を奏請したのが何で悪いか……然るに政黨者といふ我利我利亡者等は、他の一切の批政を顧みないで、唯だ此一事をのみ高調する。………唯其欲する處は、政權と黨利とを奪取するにある。眼中國民なく、國家なく、皇室なきは、今日の政黨者流である。機會あるごとに、を國擧げて鮮人と融和せねばならぬことは、吾々同胞の責任ではないか。……然るに特に稀なる機會に於て皇恩の厚きを知らしめんとする處置に對して、徒らに非難攻擊を加へる。憎むべきは今日の政黨者流である。」

政治といふものは畢意するに權力の奪ひ合ひである。政黨とは此權力爭奪戰の戰隊に外ならない。どんな偉い政治家が出ても、此事實から免れることは出來ない。アダム・スミスの樣な經濟學者すら、「政府は常に例外なく社會の最大浪費者だ。」と見做し其仕事を最小限度に縮めよ、と言つた。世の政治だの、政黨だのといふものが、縮少されればされるほど、民衆は幸福になるのである。婦人參政運動の如きも此事實を忘れると社會を奈落の底に投ずる運動となる。私自身の考へでは、寧ろ政治無用の社會を建設する爲に努力する事が、婦人解放運動としては最も適當な又美しい仕事であると思ふ。政治といふものゝ無意義のものであることは今度の怪寫眞事件が明證したであろう。

時代思潮の無理解

下田將美

最近の社會時相の中で私の心を搏つたものは、所謂京大事件として傳へられる各大學々生四十餘名の檢擧起訴事件である。事件の内容については、猶ほ詳細を知ることが出來ないので果して、どの程度までの犯罪であるか輕卒な批評を下すことを愼みたいが、私がこの事件について言ひたいと思ふこと

は自ら別の方面のことである。

此事件が、現社會制度の破壞革命を企つる實行にあつたものとすれば、現制度の下にあつては、之を犯罪として罰するのは當然の處置である。しかし實行問題をはなれて、一個の學究として理論的に研究して居るのならば、それ　學門の權威として、自由に學徒に許された所のものでなければならない　これは一片の理屈である。云ふに易き議論である。

けれども、元來學究的に研究すると云つても、社會制度の問題は他の科學のやうに、檢微鏡や、試驗管を對手にす　ものではなくして、現にわれらが生　てゐる社會の姿そのものを對手にしてゐる　そこに不滿が生じ、欠陷を發見する時には、單に學究的の興味からともすれば一歩を進め易くなるのは止むことを得ない勢である。まして今日　やう　社會の思潮が根本的に動搖し　混亂してゐる過渡期にあつては誰しもが、書齋より街頭への叫びを心の中に聞き易いのは無理のないことであらねばならない。

今回の事件は、學生に罪を認む可き點も多いであらう。しかし私は政府として、爲政者として何故に此過渡相を正しく視ないのであらうと思ふ。檢擧の模樣や、彼等學生の取扱ぶりを見ると警察官は大逆犯人でも捕縛するやうな態度で、最初から不屆きなる犯罪者として目し今日の過渡期に現はれる青年の心理に、何等の同情をも理解をも持つてゐないやうである。かうした無理解が實際問題としてはどんな影響を及ぼすか純なる青年の心にどんな印象と信念をたつきけるか、當政者は此點について、深く反省した事があるのだらうか。

ひとり今回の問題だけではない。嚴に放送局が組織を改めた時、遞信省は最高幹部に官吏を配し、次官の一人は「最高幹部は官吏でなければならぬ。民間のものを任ずれば、危險思想を放送し易い」と云ふ意味のことを放言してはゞからなかつた。此愚劣なる官吏思想こそ、今日の爲政者なり官吏なりの頭にこびりついてゐる淺薄なる自負であり、明盲に等しき低腦思想なのである。官吏だけが正しい思想、健全なる思想の所有者であつて、民間のものは悉く危險分子なりと考へる所に、百般の誤解と不祥事が生れて來る。そして一方には疑獄事件やら怪文書が現はれて、官吏がいかに健全にして良き思想の持主なるかを雄辯に物語つてゐる　誠に痛快なることである。

私は無理解ほど世に怖る可きものはないと信ずる。今日の思潮の無理解である限り、爲政者は爲政者の資格なきものである。

婦人問題の如きも、果して今日の官吏にどこまで眞の理解を持つてゐるものがあるか理解なき所に吾等は何の期待をも持ち得ない。私は何とかしてもう少し政府なり官吏なりが時代思想に目覺めて貰ひたいと心から賴みにもならぬことを希つて止まないものである

愛と貞操と家庭と所謂『社會的制裁』に就いて

伊福部隆輝

一

「婦人公論」秋期特別號所載「家庭爭議に關する女流相談會」の記事を績んで、僕は此等女流思想家諸氏のその社會學的無知とその貞操觀念のあまりなる野蠻幼稚なのに一驚を喫した。

こゝで大手をふつて歩き廻つた貞操觀念は實に尠く共二世紀を遲れてゐる。即ちせいぜい近松門左衛門當時の思想である。

この談話會で問題となつてゐるのは「夫に戀人の出來た場合に、その妻たるものは如何なる態度を執るべきか」こいふにあるが、諸家の意見中僕の賛意の持てたのは山川菊榮氏一人で他の諸氏、とりわけ大いに長廣舌を振つて居られる、吉岡彌生、山田わかの二氏に至つては「愛」の何たるかを解し得てゐられない點に於て、從つてその貞操觀念の固陋幼稚野蠻なる点に於て、殆んご現代女流思想家とは思へないほどである。

平塚明子氏は、流石に以上二氏とはより新らしい家庭觀貞操觀をもつてゐられるらしいが、その所論があまりにも消極的であり、厨川氏に至つてはせいぜい文學少女程度の思想で問題にならない。

以下、僕は諸氏の意見を傳へながら、その何が故に不徹底であり、幼稚であり、無知であり野蠻であるか説明してゆきたい。更に出來得べくんば、僕自身の貞操觀、庭家觀をも述べて見たいと考へる。

先づ諸氏の所説の根本的誤謬は、愛の眞實性に對して全然無理解であり、從つて既婚者の第三者への戀を罪惡視してゐられることである。この根本觀念から諸氏は戀人の出來た場合の夫を考へ、それを論じてゐられる。

その爲に吉岡氏や山田氏の眼には單なる淫奔からの、その故に戀愛とは呼べないほどのものと、さうでない眞實なる戀愛例へば有島武郎氏や、石原純氏のそれ等との間に、何等の本質的差別を見出してゐられない。

例へば吉岡氏は、石原純氏の原阿佐緒女史との戀愛に對して、

「(前略)もうあの人の場合などは結婚してそれこそ十年以上にもなりませう。さうなつてからどうもお前とは合はないから外に女を求めるといふことは、私は理屈に合はないと思ふのです。だからやはり社會の制裁がないから男の我儘だと思ひます。男の所謂我儘で、他の人に愛を求めてその方がこちらよりよかつたらそれに變へるなどは非人道だと思ひます。」

と言ひ更らに

「人の尊いところは相當に忍耐もし、環境によつて考慮もして貰はなくちやならぬと思ひます。如何に自然を尊重するとは言へ、人情として自分の妻や子供のことを考へて、自分だけよければいゝといふ考へはすてゝ貰いたいと思ひます。」

それから

「私は阿佐緒さんの魅力に引張られたのだと思ひますね、あの人は學者でも、社會人としてしつかりした所がなかつたかも知れないと思ひます」

と、まるで石原氏が相手の婦人の單に女色にまよつてふら／＼と出たものとのみ見られる。

そしてこの無理解に對して穩當な、むしろ穩當すぎるやうに思はれる平塚明子氏の、

「妻や子供のことを考へないどころではない、どの位考へたか知れないと思ひますが。そしてそのことでどんなに苦しんだか」

そして

「私は非常に考へ非常に苦しんだあげくあゝなつたのだと思ひます」

といふ辯護に對して、吉岡氏は更らに次のやうに威氣高になつて逆襲して居られる。

「さうするとね、あなたのお考へは、こゝに夫婦關係があるが、それは相當愛があるが、しつかりした愛が起つてゐないといふ場合には、いくら男をこしらへてもいゝのですか」

「そこを今後若い人にはもう少し自制力を強めて貰いたいと思ふのです。あまり自然のまゝを發揮させないやうに、人間として自制してもらいたいですが、私などはさう思ひますね」

と言ひ、平塚氏が「それは話が違ふ」と言はれるのに更らにおつかぶせて、

「自然のまゝでせう、こちらが嫌になつたからこちらに行くといふのでは」

と、事實を無視した大まかな概念論できめつけてゐられる。

次に山田わか女史の所說のその根帶を爲してゐる觀念は「社會の風敎を亂さない」といふことが至上のことであり、從つてそれは積極的ではなくて消極的であり、進取的ではなくて保守的であることを免れぬから、どうしても「臭いものに蓋」的になつてゐる。

女史には問題の根本を見究めやうとするやうな思想家批評家的の態度はない。「社會の風敎を亂さない」事のみを考へて、そのやうな事件の原因を究めようとされない女史は、すべてに對して吉岡女史のあの大まかな概念論で極めて行かれるのと違ふ筈はなく、石原純氏問題で、島中雄作氏の、

「あれだけの學者を、それだけで葬つてしまふのは氣の毒だし、又日本の損失にもなりませう。その意味で一槪にさういふ譯にもゆかないといふことは有はしませんか」

に對して

「けれども全體の風敎を考へれば惜しくはありませんね。全體の風敎を害するといふ上からいへば、あの位な學者は葬つても差支へありません」

と言つて居られる。そしてさうして葬つてさへ行けば、風敎が亂されることなく、風敎が亂されなければ、人間がどんなに不合理な、不眞實な虛僞な生活をしても差支へないものらしい。乃至は、風敎をさへ害さなければどんなに淫奔な行爲でも差支へなく思つてゐられるのか。

兎に角、以上引例した如く、吉岡、山田の兩女史は、全然戀愛の眞實といふものは無視されてゐる。從つて貞操とか、何とか言つて居られても、この貞操なるものゝ觀念は、何等人間性に根ざした生命的な貴いものではなく、社會の現狀を混亂させない爲の道德であるにすぎぬのである。それには何等、人間生活をよりよく、より貴いもの、價値あるものにして行く爲の、何ものをも見出してゐられるのではない。

二

斯くの如き戀愛及び貞操の考へ方は、單に今日の思想から遲れてゐるとのみいふべきでない、それは全く近松門左衛門以前の考へ方である。

近松の思想は、義理はこの世の掟である。しかし戀は人間性の眞實である。この世の掟によつてこの世に於いては罰せよ。しかし未來は戀の誠の世でありたい、といふのであるが、この今日の吾々から見れば、そのしばられてゐる義理そのものゝ倫理的並びに社會的批判をもせずにその義理にしばられてゐるのを齒痒ゆく思はれるの

に、女史等は、そこどころでない、二百數十年前の近松の見出した戀愛のまことさへ未だにわからないでゐられるこ言はざるを得ない。

そしてこの戀愛の眞實性を知らず、否知らぬ故にたゞ社會風敎とか、何とかと雲のやうな不慥かな不慥な莫然とした觀念に憑かれてゐる。

この時代錯誤者等は、貞操といふ美名のもとに、多くの男女等をして、何等眞實性をもたない野獸的性交生活にとぢこめることは、何とも思つてゐない、そしてそれを爲さしめようとして主張してゐる。

これ等の事實を指して吾々は幼稚と言ひ野蠻と言つてはならないであらうか。尠くとも僕には、一向差支へないように思はれる。

三

次に諸氏の社會學的無智であるが、それは諸氏から見て罪惡であるところの、妻のある男性が戀人をこしらへた時の社會的制裁論である。

この議論は山田わか女史が主こして主張してゐられるのであるが、吉岡彌生女史もなかなか元氣のいゝところを見せて居られる。例へば

「ですからかういふ場合、妻が夫に對してごうしたらよかろうといふよりは、ほかの女に愛を求めるやうな男は世の中からすつかり棄てゝしまいたい、所謂社會的制裁を加へるのが一番よいと思ひます」

と言ふ吉岡女史の、言葉を聞き給へ。そしてこの意見に贊成して山田女史が、

「あなたの仰有ることは今私の言つた「それは惡いことだ、不都合なことだ」といふ空氣をつくるに必要なことです。つまり社會的に罪るのですね」

と言ひ更らにその具體的說明として內務參與官鈴木富士彌氏の紅葉館の女中との問題を例にあげて、

「(前略)だからあの花嫁さんにそんなことを望むのは無理でせうが若しあの人が、女性の位置こいふものを自覺してゐて「さういふことがあつたのか、それでは左樣なら」と歸つて行つてもらいたいですね。同時に鈴木富士彌さんは、今の位置を失なはなければならない。さういふ風に女も世間も一團になつて來なければ男の惡性は矯りませんよ」

と言つて居られる。

更らに吉岡女史は、「新聞雜誌がその人の品行品性といふ樣なことは餘りに問題にせず、手腕とか才能があるとか言ふことのみを切りに持て囃すからいけない」

と言つて故有馬氏の例をあげ

「むしろかゝる場合に婦人が起つて、かういふ人間を社會から葬つてしまわなければならないと思ひます」

とも言つて居られる。又

「さうして現在でも今後でも不品行をした男子は再び社會に出られないようにするといふことが一番大事だと思ひますが、代議士でも相當な學者でも、石原さんなどは大學を出されましたけれども、隨分社會で持囃してゐる、あゝいふやうなことが間違つて居ります。云々」

この吉岡女史の言葉に對して島中雄作氏が

「でもあれだけの學者をそれだけで葬つてしまうのは氣の毒たし、又日本の損失にもなりませう、その意味で一槪にさういふ譯にもゆかないといふことも有はしませんか」

と言はれたのに對して山田わか女史は、

「けれども全体の風紀といふことを考へれば惜しくありませんね、全体の風紀を害するといふ上から言へば、あの位な學者は葬つて差支へありません」

と答へ、且つ吉岡女史は、

「今の社會は學者とか藝術家とかいふ人を人格と切り離して見るから風教上大いに困ると思ひます。人格をぬきにした科學者藝術家といふものは認めたくありません。アインスタインの通譯なども、出す人も出される人も遠慮して貰ひたかつたです」

と言つてゐられる。

勿論この兩女史の意見が實際的に行はれるならば、女史の攻撃されるやうな罪惡が、今日よりも比較にならないほど少なくなるであらうことは疑ひない。

しかしながら問題は、この社會的制裁のよいかわるいかにあるのではなく、かゝる社會的制裁が今日の社會に於て果して可能であるか、不可能であるかにあるのである。

そして僕達の知り得てゐる社會學的知識から見ると、それはよいわるいを超越して全然不可能である。

何故であるか。

吾々が社會的制裁を受けるといふことは、言葉を換へて言ふと、吾々が、吾々と社會とを結びつけてゐる社會的紐帶を絶たれるといふことである。

ところでこゝに問題になつて來るのは、社會との關係であるが、未發達の社會に於ては、その分化が單純である爲に吾々と社會との關係はそれだけ單純である。

例へば、未開社會に於て個人とその社會とを結びつけてゐるものは、僅かに地緣的關係と血緣的關係位なものである如きである。

かゝる社會に於ては、個人はその社會的紐帶の一つである地緣的關係であるその土地に棲むことを否定される

ここによつて、その全生存の半分を否定されることになる。

ところが社會が分化發展してゆくに從つて、吾々を社會に結びつける紐帯は多くなつて來る。

例へば現代人である吾々は社會との關係に於て、單に地緣的關係と血緣的關係のみでなく、經濟的關係職業的關係宗教的關係、等のあまたのものをもつてゐる如きである。

これを逆に言ふと昔の人間は數の尠ない社會にしか屬してゐなかつた。ところが今日の人間は、多くの社會に屬してゐるといふことになる。

吾々が多くの社會に屬して來ると、つまり吾々を社會に結びつける社會的紐帯が多くなつて來ると、その一本一本の紐帯そのものと自己の生存との關係は、より弱いものになつて來る。つまりその紐帯の一本が絶たれる事によつて生存をおびやかされる度合が弱くなつて來る。

抽象的言議をやめて具体的事實で說明しよう。

石原純博士の場合をとつて見てもいゝ、例へば石原氏が地緣的關係と血緣的關係のみかもたない未開社會に於て、あの如き事件を起したとすると、その戀愛の純不純、正不正は兎に角として、その社會の平和を亂すものとして地緣的關係血緣的關係に於て大いなる打擊を受け、生存を根抵からおびやかされるほどの社會的制裁を受けたであらうことは疑ふべくもない。ところが現代社會に生存してゐる氏は、それだけの社會にのみ屬してゐるのでない。學術的社會に於て、經濟的社會に於て、その他多くの、氏のその行爲が何等の平和を亂さない社會に屬してゐる。

そして何等氏の彼の行爲によつて平和を亂されない他の社會が、自己と關係なき他の社會の事を問題にしないのは理の當然であるばかりでない、自己と關係なき他の社會の爲に自已の社會が損傷を負ふことは堪え得るとこ

ろでない。

石原氏は彼の事件によつて、それが平和を亂した社會に於ては勿論それだけの社會的制裁を受けてゐる。例へば夫人及親族等から爪彈きされるとか、仙臺に居ることが出來なくなつたとか、等々の。

しかし他の彼の事件が平和を亂さない社會に於ては、何等の制裁をも受けてはゐない。そしてそれは當然である。

支那の古哲人の言に「その罪を惜んでその人を惜まず」といふ言葉がある。これは、勿論倫理觀念の進歩向上によつて達する境地として言はれた言葉ではあるが、吾々から見れば、何等倫理觀念の進歩向上によることを要せず、社會の分化發達と共に必然に達し得る實境だと思はれる。

即ち社會がいよいよ分化發達して複雜化してゆくと共に、一つの行爲が、社會的により廣くひゞくやうにはなるが、それと共にそのひゞき方は個人的生存の上に於ては甚だ弱くなつてゆくのである。

この原理の上に立つて社會的制裁といふことを考へて見る。

例へば貞操問題などに就いてはどこに行つても石原氏や鈴木氏の說は殆んど權威を持ち得ないであらうけれども理學上の問題に就いては、又は政治上の問題に就いては、昔日と異るところなく二氏の說が權威あることは疑ふべくもない。即ち、吉岡女史や、山田女史の希望される「社會から葬る」といふことは、必要の有無、事の善惡に超越して全然不可能と言はざるを得ないのである。

四

以上僕は大体に於て諸家の說を批評し終たが、最後にこの問題に對する僕自身の見解をほんのかいつまんで述べて置きたい。

これは批評しながらも述べて置いたやうに、この問題は先づ全然性質を異にした二つの場合を豫想しなければならぬ。第一の場合は石原氏とか何とかのやうに、ほんとうに愛が移つた場合であるし、第二の場合は、單に夫が他に色女をこしらへた場合である。

第二の場合は、勿論夫が徹頭徹尾よろしくない、かゝる夫に對しては妻は如何なる慘烈なる攻撃を爲しても過ぎるといふことはない。

かゝる非難攻撃は單に女性の立場からのみでなく廣く人倫的立場から攻撃しなければならぬ。そしてこれは最後は、この不倫の夫が態度を改めることによつて局が結ばれる筈である。否、結ばせなくてはならぬ。それが妻たるものゝ勤めであり、同時に社會の勤めでなくてはならぬ。

が、第一の場合に於ては、さう簡單に行かぬ。こゝには善い惡るいの問題がない。誰も彼も不幸の一齣で盡きる。從つてその解決方法は、第三者の嘴容すべき問題でない。當事者同志の、ほんとうに眞面目な眞劍な考慮に待つ他はない。

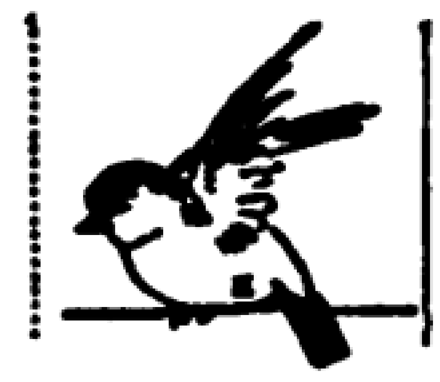
かうして後、元の鞘に收まるか、新らしい愛人のところに行くか、が決する。そしてはじめて離婚後の問題が起きる。そこには賠償問題も起きやうし、子供のある場合どうするかといふやうなことも問題とならうし、兎に角實際手續上ではいろいろ複雜な問題となるであらう。

が、原理的に言へば簡單である。家庭は原則として愛の上にのみあらねばならぬ。愛が消滅する時、家庭は崩壞しなければならぬ。吾々はこの原理に從ひさへすればいゝ。その方法論に就いては、この小評論のよく盡し得るところでない。

最言に一言して置く。

從來の如き男性の因習的不攝生から來る妻以外の他の婦人と關係する如きことは、男性の自覺によつてなくなるべきものであるし、これを無くせしめるやうにしなければならぬ。

しかし眞實なる、單に性慾のみでない戀愛は不幸なことであるけれども、永遠に無くし得ないであらう。そしてむしろ吾々は、今日よりもより一層も二層も眞劍に結婚問題を重要視する他はあるまい。そしてそれほどの眞劍に考慮した夫婦關係に、不幸にして瑕が入る時、社會はこれを爪弾きするよりもむしろ、氣の毒なる人々として遇するであらう●



武者小路實篤

婦人運動は、理屈を云つても判らない男の爲になされたものだらうと思はれる。

◆

人間として健全な生き方をしやうと云ふ人があまりにすくな過ぎるからいろ〳〵の運動は起されて來る。

いくら理屈で云ひきかせても、横に鍬をひく人間ばかりが多い時には、運動を初めるより仕方が無いだらう。男全體がもつともつとよくならねば婦人運動のおさまりはつかない。

今の社會は、一方が德をすれば、一方が損をしてゐる。階級鬪爭はそれである。

勞働者が損をすれば、資本家は得をしてゐる。損をして困つてゐる者に進歩しろと云つたところでそれは駄目である。

これ程無理な話はない。

◆

不幸な人に同情して、その人が幸福になつた時に、淋しい嫉妬を感じるのはいけない事だが、人間に多い事實だ。それは最初から、けつして同情にはなつてはゐない。惡るい事だと思ふ。

古來の日本婦人には、犧牲と云ふもの、解釋が判らない人が多い。

家庭と云ふ一つの單なる型式の中に注ぎ込む犧牲は、犧牲になつてはゐない。

苦しい中から愛が生きるか、子供が生きるか、或は親が生きる場合の忍苦こそ、美しい犧牲として認める事が出來る。

一たん嫁入りしたが爲めに、その家の夫を不幸にし、姑たちや家庭全體を不幸にして泣きながら辛抱する婦人は犧牲では無い。

皆が幸福になる爲めには、家庭をこわす事は構はない。

◆

人間は壓迫するばかりでは、決してよくならない。惡いところに入つてゐる時には、だまつて善い別な世界をその人の前にあたへて、自然によい方面へあるいて行ける樣にしてやる事が第一である。

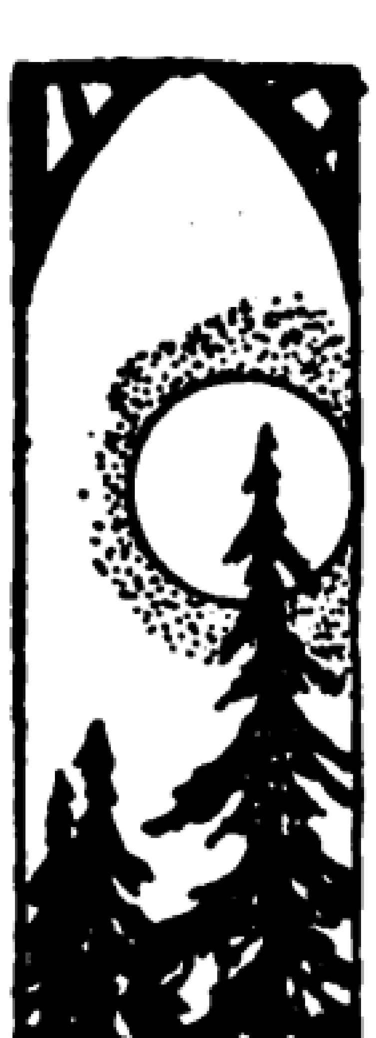
こちらへ來たまへ、いざとなつてみて、それでまだ進み得なかつた時には止むを得ず、手を引いて引き出さねばならない。

困難の中に押へつけた婦人の自然な要求をしりぞける事は出來ない。

◆

新らしく生きやすい世界をあたへてから、まちがひはためねばだめである

かつては女性の立場などに對する考へ方も只單に女の問題としか見なかつたが二人の女子の父となつてから、女性の立場は女の生命から見、親としての深い心から考へてもみる樣になつた





女性と階級的自覺

——(偶感錄から)——

山田清三郎

私は女性に、家庭より又は逐放される、一定の時間を與へたいと考へてゐる。

現今の女性が、單なる男性の從屬に過ぎないことは、餘りに明か過ぎる事實である。從つて女性は、家庭といふ男性本位の生活單位の拘束から、殆んど絕對といつてもいゝ位に脫却することを許されてゐない。

女性は、竟に家政婦として、その生涯を、ゑらまれたその夫の前に捧げなければならないやうに運命づけられてゐるのだ。

このことは、よほど兩性問題に對して、進步的な考を有してゐる、急進思想家の家庭について見ても、殆んど例外といふものはないのが實狀である。

これはたいへん間違つたことだ。女性は先天的に男性の從屬者として以外の性能をさづけられてゐないといふものもあるが、そんな馬鹿なことはないと思ふ。

さういふ觀方のもとに、女性を暗に輕蔑し、女性が自覺などゝ騷いで見ても、それは竟に一時の氣紛れ以上の何ものでもあり得ないなどゝ、斷定して憚らないものも多いが、それは結局、資本家が勞働者を瞞着するのと同じく、男性が女性を自己の都合のいゝやうに支配しようとするところから來てゐる謬想である。

その意識的たると、無意識的たるとはこの場合たいした

問題とはならない。

　女性は決して、單なる男性に對する從屬者的觀念から、解脫し得ないものではない。女性といへども、階級的に自覺することも出來れば、集團意識も充分に把握し得ると私は考へてゐる。

　人類の歷史的使命も男性とひとしく認識することも出來れば、また行動の上に於ても立派にこれを具現し得ることが出來ると思ふ。たゞそれを男性がはゞんで得せしめないだけの話だ。

　私は冒頭に、女性に家庭より解放される一定の時間を與へたいといつた。私は現實的に最も可能な問題として、先づそのことだけに於ても、女性に、自覺の一歩をかち得さしむるの便宜を與へ得るものと信じてゐるからである。

　女性が數人乃至は數十人集つて、研究會を開くのもよからう。始めの間は、單なる雜談會程度のものであつてもいゝ、一定の時間家庭から解放されて、一定の時日に集まることゝする。許されるだけ、回數の多い方がいい。たゞそれだけでも、女性の間に、いつしか集團精神といふものが必ず醱酵して來るにちがいない。そこから自覺の端緖はほぐれ階級意識なども自ら發生して來るにちがいないと私は思ふ。

　女性に、組織的生活の便宜を與へよ。女性に組織的訓練の時間を得せしめよ。進步せる思想を有する男性など、卒先してこれをなさねばならない。

　これからの無產階級運動は、女性の協力をまたねばならない。社會運動に携はるものゝ家庭に起る悲劇などは、多く女性の無自覺から來てゐる。これは女性の罪でも何でもない。女性に集團精神や、階級意識を把得せしめる機會を男性がつくつてやらないからだ。

　社會思想家や、實際運動に携つてゐるものゝ家庭には、家庭爭議が甚だしいといふことだが、これは理由のないことではない。社會思想家や、實際運動に携つてゐるものはその妻に多くの場合、犧牲的忍苦を要求してゐるからだ。具体的にいへば、自分は社會並に社會人のために種々な壓迫や迫害と戰つて働いてゐる。妻たるものも普通人以上に家庭的苦痛に耐ゐなければならないのは當然のことだといふ風に、これは明かに個人主義的な過失を犯してゐる。無智なものに文字の知らないことを責むるのと同斷だ。家庭爭議の原因を除却せずして家庭爭議に惱まされるのは愚の骨頂だ。

　家庭爭議の原因を除却するには、先づその妻たる女性を敎化しなければならない。それには前述の如く女性を自覺せしむる機會と便宜をつくつてやることが何より捷徑ではないかと考へる。

紡織工場視察の報告

河崎夏子

國際勞働協會婦人委員會は、關東關西に亘つて十五纖維工場の視察を終へて婦人勞働問題に關する實地の調査研究を進めました。やがて各項に就いての詳細な報告書が製作される筈ですが、次に揚げるのは、その內の「教養、娛樂の施設に就いて」擔當せられた河崎氏の報告書の大略であります。

紡織工場に於ける教養、娛樂の施設に關する諸事項は、深夜業の廢止、勞働時間の短縮につれて、寄宿舍制度の改善と共に一層考究せらるべきものであるが、私は短時間に全工場を案內せられるので、ともすれば工場寄宿舍丈の表立つた方に、時間と注意を奪はれやすく、又案內者もそこへ力を入れた上に、各工場よりの數字的な回答があまり來ないので、そこに正確な、報告がなし得ないを殘念に思ひます。

第一　紡績工場に於ける教養施設

教育施設に就いては、一方義務教育完了の言譯のため、地方女工手の惹きつけ策として、どの工場でも相當考慮せられてゐるかのやうであつた。

A　補習教育施設

作業の性質上技術教育を主とする徒弟教育といつたもの

は一つもなくて（製糸工場に一つあつたが）すべて人道主義的立場よりする教化事業でもいふか、國民普通教育の補助の外に、二三の傳統的な女藝を授けて、微かながらも良妻賢母の香をかゞせようこいふのが、通じての教育方針の樣であつた。勞働者教育こして、此れが當否は又別問題になる。

施設の方式

會社の系統と、拂はるゝ考慮の多少によつて施設方式に四通あるのを觀取した。

◆**イ從來の組織のもの**　義務教育未完了者への算讀の補習教育と、他の希望者には裁縫教授を、それに生花茶の湯編み物料理さては洗濯などの諸女藝を加へて、毎日又は隔日に二時間づゝ修業年限などゝ限定せずに教授してゐる。十三工場の中、九工場まで此の組織が行はれてゐた。監督當事者の誠意如何によつて寺小屋の再現の如き雜然となり易いのではあるが、第一表の如きプランを定めて行屆いた運用を見せてゐる所もあつた。

◆**ロ女學校組織のもの**　從來の女工手は、義務教育未完了者が多いので、學科の程度も尋常五六年のものであつたが、近來工場によつては尋卒或は高卒を主として採用するので、程度を中等普通教育にまで高めて、例へば芳蘭女學校などゝ稱し、三四ヶ年の修業年限で本科專修科補習科に分れ、毎日二時間づゝ第二表の如く基本學科こ諸女藝とを系統的に授けるのである。十三工場中四工場あつた。此の方が就學律も多いやうである。

◆**ハ講習制度**　同じく學校組織ではあるが、學科の配列に於て、別途の試をしてゐる工場が一つあつたそれは講習制度である。

第一表

大正十五年七月行事（東洋紡名古屋工場）

日	曜	朝（七―九）	晩（七―九）	
一	木曜	食堂口演	補習教育 裁縫教授	食堂口演
二	金		″	割烹編物
三	土			ダンス
四	日	生花、茶の湯、園藝、作法、琴		
五	月	洗濯	″	唱歌
六	火		″	編物
七	水		″	割烹
八	木		″	唱歌 自修寢容
九	金		″	割烹編物
十	土		″	ダンス

十一日	生花、茶の湯、園藝、作法、琴 洗濯		説教
十二月		〃	唱歌
十三火		〃	編物
十四水		〃	割烹
十五木	食堂口演	〃	唱歌
十六金		〃	割烹編物
十七土			スクールダンス 自修貎容
十八日	作法、生花、茶の湯 園藝、琴 洗濯		説教
十九月		〃	唱歌
二十火		〃	編物
廿一水		〃	割烹
廿二木		〃	唱歌
廿三金		〃	割烹、編物
廿四土			ダンス
廿五日	生花、茶の湯 園藝、作法、琴 洗濯		
廿六月		〃	唱歌
廿七火		〃	編物
廿八水		〃	割烹
廿九木		〃	唱歌
三十金		〃	割烹、編物
卅一土			ダンス

第二表

一、芳蘭女學校（本科四ヶ年）

毎週時間配當表

	一學年	二學年	三學年	四學年
修身	1	1	1	1
讀方綴方	2	2	2	2
算術	2	2	2 珠算	1 〃
家事			1	1
唱歌	1	1	1	1
地歴	1	1		
理科	1	1	1	
裁縫	5	5	6	8、ミシン
作法	1	1		
割烹			3	3
生花			3	3
	一四	一四	二〇	二〇

二、專修科（三ヶ年）

裁縫

國語

算術

三、補習科（本科卒業後一ヶ年）

修身

國語

教育

球算

英語

裁縫

唱歌

割烹

生花

由來女工手達の學習狀態は、最初は希望者が多いが少し六ケしかつたり、或ひは時間と体の都合上、激減異動が甚しいので、所謂學校でしてゐる如き循環式制度では、どの課目をも修了することが六ケしいので、それでは女工手のための教養施設である本來の精神が生き

ない所から、第三表の如き時間割で試みられてゐるのである。

第三表

時間割（講習組織）

	普通科		補習科	
	朝	晩	朝	晩
月	文藝	英語	食物	修身
火	英語	英語	食物	食物
木	英語	音樂体操	食物	文藝
金	音樂体操	英語	音樂	食物

◆ニ講義錄制度　一會社ではその本支工場の女工手のために「實科女學講義錄」といふものを毎月一回三ヶ年完了で發行して、修身國語作文家事作法習裁縫の中等程度の講義をなし、一冊十錢で頒つて、一方女工手の教養に資し、他方他方各工場內へ女學校の設置に代へてゐた。坊間到る所に見る中等高女の講義錄を取りれたまでのものではあるが、學校組織に對する他方面の一試みである。

◆ホ自習案講話その他

はなほ教育施設として、寄宿舍の主婦養成の自習案講話或教婦養成などの施設もあるが、こゝには省くこととする

三、是等の運用

以上は教養施設方式の概觀であるが、是丈の施設がどこまで女工手達のものになつてゐるかといふに、それは就學步合平均3％であるによつて大体を察知することが出來る「女工達は忙しいから十分の學習時間がないのです、又工場としてもその方で精力を殺がれれば翌日の作業に障るから強ゐて奬勵もしないのです」と工場長や人事係が說明してゐた。

實際女工手達は、今はこれらの施設を運用せんの氣力も時もありますから。工場とベットの間を馬車馬のやうに眞直に一往復するに、己に彼女丈の若き日の一日が暮れつくすのであるから。

然し年若い彼女達は、餘力と時間とさへあれば「知り度學び度い」のにちがひない。夜業なき或一絹布工場では、午前七前——午後六時の十時間作業で、氣力と時間に稍々餘裕があるから、即ち就學步合は5％の出色がり、更に深夜業を八時間半二交替制をとつてゐる一紡績工場では、就業時間九時間（三十分休憩）睡眠時間八時間、全暇七時間あり、氣力と時間の十分ある餘裕あるため第四表の如く就學數は14.8％の重步合を示してゐる上、女工手配は八百人中二〇〇人まで同會社發行の實科女學講義錄を毎月購讀する全力をさへ持つてゐる。

當事者はまづ夜業すをやめ作業時間を短縮するいが彼女等への第一任務である。然らば彼女丈は嬉々こして學に就き藝を磨くでらう。

第四表の一（某夜業廢止工場）

就學希望者數

	甲	乙	書專	計
補習科	72	60	19	151
高女實科	27	30	5	62
裁縫	214	179	15	408
割烹	16	59	5	80
唱歌	39	70	1	110
生花	31	34	5	70
作法	3	1	2	6
ダンス	37	59	1	97
洗濯	82	66	——	148
家計科	21	49	——	70
	590	691	57	1338

女工手總數　800人

就學歩合　1˙48%

B 圖書室

1 施設の有無

十三工場中これがために一室或は別條を構へる工場七、別に設置するよく個人に任せてする工場六、別に巡回文を有するものの二、移動圖書館を備へるもの一、

2 備付圖書

社員の研究室と兼用の圖書館で四三〇〇冊或はそれ以上の書を藏してゐる二三の工場もあつたが、一般に通俗文學修養書が多く、ある二工場にはアルス婦人講座、藤村讀本圖と人、工場、漱石全集、結婚愛などの文學書をも交へてゐた。

8 新聞紙

新聞は關東は東京日日、東京朝日、時事國民多く、關西は、大阪毎日、大阪朝日に限られて、前に會社發行の「時報」式のもの及び勞力新聞が加はつてゐた。

4 雜法類

雜法類は女の力、泉の花、女工の友、工手の母、相愛、まとゐ等、工場世界のものが、殆ど主で、之に世間の雜誌は少女の友、小女畫報が交り、或工場では主婦の友、婦人の友を見かけた。

然し深夜業を廢止してゐる一工場事外は、いつどの工場に於ても圖書室或は各自の部屋で書見してゐる女工手の一人だつて見かけたかつた。彼女等は工場内に働いてゐるか寄宿舍に晝を夜にして熟睡してゐるかの外、圖書室はおろか廊下でも洗濯場でも便所でも見かけたことはないのですどの工場にも三千人に近い女工手たちが居るのに、就學歩合の低いのと同理由であるはいふまでもよい。

C 講話

どの工場でも月二回以上は修養講話として宣教師、布教

師、諸名士、工場長、或は高級社員の話を聞かせてゐる。「怒るな働け」「心の富ある家」「從順の善往」「三千圓貯めた感心な女工さん」等々の講座である。然しおそらく常任に疲れ切つてゐるのであらう、女工手達にとつては、之等の話はどうでもよいもの位に聞かれてゐるかもしれない。それが公休日の夜などに予定せられてゐる工場もあつたがた、まの公休日を、愈々ヒイキの引倒しではないだらうか。

D 諸種の印刷物

女工手等の常識修養と工場内上下の意志疏通のためと稱し、三會社は「××時報」「▲▲の汽笛」「△△の友」などの印刷物を、毎月一回、或は無料で或は一部五錢位で、その本支工場の全女工手及び其等の家庭に配布してゐる。

E 託兒所幼稚園

二つ或は一つを設置するもの三、
何れをも設置しないもの一〇、
しないが子女養育の當をして之に代へてゐるといふもの二、

入園兒は（二ケ園）二七〇、入所兒（同上）一一〇、それも大部分は社員の幼子女であるとの事であつた。未婚女工手の大多數な紡織工場では、此の種の施設より先に急を用するものが多い筈である。

第二、娛樂施設

敎養施設の時と同じく、元より女工手惹き付け策の心も多分に交つてはゐるが、さすがに苦い單調な女工手達の生活を想ひやつて、どの工場でもこれが施設には相當考慮してゐた。

1 娛樂室

一時に千人二千人を容る、廣大なる一室を設けて、月一回或は年に三四回、芝居活動學藝會等を催す。

特に娛樂室の設ある工場　四
食堂と兼用なるもの　七
なきもの　二

無き工場は野天にて或は劇場を借りてするとのこと

2 遠足と園遊會

施設といふと少し當らないが、遠足と園遊會は女工手の刹那の天國との事である。遠足は年一二回關西地方は奈良和歌山、伊勢、京都、近江地方へ關東地方は鎌倉、逗子、稻毛等へ時にはお花見、汐干狩をすることもある。園遊會は場内に祭つてある稻荷社の祭禮に場内で家族までが押しかけて催し、お盆には盆踊又運動會をするとの事である。

3 運動諸器具の備付

テニス　8工場　ピンポン　7
バスケツトボール　3　メリーゴラウンド2

圓木	2	ブランコ	2
バレーボール	2	デッドボール	1
催付といふのではないが、常にダンスする工場			4

4 諸楽器の催付

オルガン	7	ピアノ	5
蓄音機	4	ラヂオ	3
ヴァイオリン	1		

5 是等の運用

是等諸種の娯樂樂施設中、1と2の場合は、且つ工場内の全人員が時には作業を休んでする場合もあるから、これを享受する範圍も廣いのであるが3と4の諸施設は屋内屋外に相當に備付けられてあつても、圖書室利用の狀態と同じく、徒らに工場を飾るにすぎないで、どの工場でも誰一人是等の諸器具を弄して喜遊してゐるのを見かけなかつた(前述の深夜業廢止の工場を除く外では)

其處では午後二時から作業に就く遲出組の女工手等は、午前十時の輝かしい太陽の下で、ユニホーム姿輕々しく、庭球に熱中してゐた。補習教室の一隅のオルガンとピアノの前には、一人は彈き一人は若い聲を合せて唱つてゐた。寄宿舍では洗濯を干しながら窓によつてハーモニカを吹いてゐる姿をさへみた。世間では普通の事象で、工場内では何といふ稀しい事であらう。



結局は、まつ夜業が廢され、勞働時間が短縮されぬ限りは、幾多の施設も女工手等の毎日を慰め娯ますものにはならないものの如くであつた。

第三　結論

各工場に於ける教養娯樂の施設は概述の如く、相等考寮せられ、或は事情の許す限り寧ろ競うてこれが改善を圖られてゐる有樣で、大体喜ぶべき傾向ではあるが、その運用に於て十分の効果をあげてゐないことも著しい事實であつた。そしてこれは夜業の廢止、勞働時間の短縮によつて、根本の整理をしなくては、何としても捌けない事である。或工場長は「近く夜業を廢止されると、女工手等は時間の過し方に困つて、所謂閑居不善に陷るでせう」と言つてゐたが、そんな愚論には耳を籍さない。そこに生ずる彼女等の余力と暇とをその教養にその享樂に、いかに轉向せしむべきかの考究が、地味ではあるが大きな問題として横つてゐるのを觀取すべきであらう。(完)

神戸の消費組合の一日

長岡保太郎

神戸へ行く毎に、「神戸消費組合」を訪問することは、近年私の習慣の一つとなつてゐる。それの生長は、私にとつて非常な興味であり、教訓である。さてこの夏旅行した際も、豫定の仕事を濟ましてから、組合を訪ねることにして組合の理事長のF氏在否を電話で尋ねた。所が「恰度今海運倶樂部で組合の會合をしてゐる。その會合は一向差支ない會合だから、來るならこつちへ來い」と云ふことであつた。海運倶樂部と云ふのは、神戸一流の海運業者の常に出入する華美と迄は云へなくとも、可成りブル張つた倶樂部であるやうに記憶してゐた私は、あの貧弱な――內容的ではないが、外形的に――組合と倶樂部とを結び付けて色々な想像を描きながら倶樂部へ行つた。直ちに二階へ案內されたと同時に、私はその階段上りつめた所で、多少豫想的光景に出合つた。

あけつぱなしにされたドアの間から。夏の午後の陽に照されて明るい內部は目をつく斗りに强い色彩でかがやいて見ゐるそしてそのだだつ廣い室の中央に置かれたたゞ一列の大食堂を圍んで、十四五人の婦人が、いとも賑やかに食事してゐる。その眞中に聞き覺えのある高らかな聲で、F氏が何か熱心にしやべつて

◈欄外雜記

今月號は、予期しない事ではあつたが、婦人公論（十月號）の中からとつて來て批評をした事が二つ重なつた。別に賴まれてしたわけではないが、然し、かういふ嚴正な立場に立つた批評は、ぜひ知識階の級婦人たちによんで貰ひたいものだと思ふ。

隨分とくだらないまやかしものも橫行する世の中だから、とくと目玉の塵を拭うて見ることが肝心。

◆

福井の古津小千代氏からいろ〳〵と同感に堪ないたよりが來た。中でも――女中に送り迎へをさせて子供を幼稚園に出したあとで、そのルス中の奥樣のお仕事と云へば、お化粧

ゐる。突差にこの場面の放射を忝けなくした私は、余程あはてざるを得なかつたが、兎も角も後刻の打合せでも濟ましてすぐ引上げることに決心して、その次の奥の室へ行つてまつて居た。F氏のテーブルスピーチは仲々長々と續く、私はもじ〳〵しながら待つてゐると、やがて、拍手と共にF氏の話は終つて、飛んで來た。この會合は組合の「家庭會」の幹部諸氏の會合であること、そして、同時にその會合はすぐに濟むこと、君のやうな見ず知らずの者が居ることは一向差支ないことなどが直ちに話されて、有無を云はさず、婦人達に紹介されて仕舞つた、私は「招かれざる客」の氣まづさで一杯になりながら、仕方なく氏の爲すがまゝにまかして仕舞つた。そして終始沈默の間に、「招れざる」に相應しい最上級の謙遜を續けた。しかし、間もなくこの氣まづさは、私の永い間の因念から來た非社會的な惰性的のものに外ならぬことに氣がついた、非營利經濟社會の建設の曙なる組合の新鮮な社會的な氣分は、私のこの惰性を打碎くのに大して手間をとらせなかつた。私は平靜を恢復させられて、更らに、この思ひ掛けない集りに參加し得たことを喜ぶ氣持にすらならざるを得なかつた。そして、婦人達の組合に對する希望や意見を、非常な興味を以て落付いて傍聽さして貰つた。

　私は消費組合運動には、可成の興味を有する關係上、永年の間――私にとつては本當に永年である――諸所の組合を訪問し居る。しかしそれの大部分は、

三昧とはなさけない。パンのために稼ぐ、母のためにこれらの幼稚ゐんが利用されるのであつたらどんなに社會的にも有効であらうに……

……云々。

◆

　全くいまのやうな幼稚園では、余裕のある家庭の子供が殆んど全部を占めてゐるので、「服裝の競爭が初まる。持物の競爭が始まる。子供はいつのまにか虚榮心が強くなつて、幼稚園で半日遊ばせて貰ふために、余分の着物まで新調しなくてはならぬといふ仕末――」

◆

本當に同感に堪へないことである。

近頃、農繁期に農村に託兒所をおく所が六分出來たやうであるが、私も

組合の事務所、倉庫、精米所の訪問である。稀に店舗を――我が國では店舗を持つてゐる組合は極めて稀である。訪問することがある。

そんな譯だから、消費組合の訪問は私にとつては、その精神は別として、その外形は常に塵臭く、汚れに滿ちて、決して人間的な感情をおしなべて滿足させる型のものではなかつた。曾つて私が、ある友人にある消費的購買組合の調査を依賴した所が、「あとで消費組合の實地の調査丈けは御免だ。汚なくつて暗黑で、官僚臭味が濃くつて閉口だ」と大にこぼされたことがある。それを又我國では無理もないと肯定せざるを得ない程、從來のやり方や、現在の狀態は殺風景であり官僚式である。そうした狀態を承知の上で、性こりもなく訪問を繰り返して居た私にとつて、これは又何たるすばらしい光景であらう。私は非常な驚異と歡喜とでこの會合の終りに臨み、皆と別れ、F氏と一所に同氏の家に歸つた。其夜遲くまでF氏から神戸消費組合の近狀を詳く聞いた。F氏が、「現金制唯一つを採用することによつてさへ消費組合は我が國に於て立派にやつて行けるものだ」と云つたやうな意見を、如何に強い確信を以て主張されたかと云つたことは、何れ機會を得て江湖に傳へたいと思ふことであるが、家庭の主婦達が、經濟上の社會的統制の必要と現實の問題とし、具体的に相互協同の問題として論議する光景を書籍の上でなく事實の上に見せつけられたことは私にとつてほんとに又新しい獲物あつた。F氏は神戸消費組合の基礎確立の日には更らに、純勞働階級の消費組合の建設の爲めに、努力する希望を有することを物語つた『私は、我が國の勞働階級の婦人達の間に、今日目のあたりに見たやうな光景が再現せらるる日の遠からざらむことを思ひ續け非營利經濟社會の建設の曙を夢みつゝF氏の二階のベッドに身を横へた。(一五、八二一五)

必々とこの事を考へる。子供が足手まとひなために何にも仕事が出來なくて困つてゐる母親、働かなくてはならぬ境遇の母親で子供を安心して預けられる處がないばかりに苦しんでゐる母親が實に多いのだから、

◆

世の母親たちは、直接自分が苦しんでゐるかういふ實際問題のために何故起つて働かうとしないのであらうか。これはいつも私の慨嘆に堪えない點である。

よし自分が出來ないにしても、それでは出來る人が起ち上つたとき、何故助けるだけの熱を出してくれないの乎、と、

問題はひとり幼稚園へばかりではない。(おく)



問題の有髮尼

智信新井だいの一考察

山本和子

智信新井だい女が數年前から天刑病院を建てるといつて山脇女史、澁澤子を抱き込んで寄附金募集をした事を詐欺的行爲として、七月中旬の東京朝日の三面を賑はした事をまだ記憶されてゐる事と思ふ。

それについて彼女の鄉里德島縣知事小幡氏の言葉を少々引用して見る。

「…………彼女は社會事業をやるにふさわしい素行の持主ではなかつたやうだ。（中略）社會事業が復雜になるといろ〳〵と新しい手段が出るものだか、あの婦人も單なる名譽心からやつたものであるかも知れない」

又新聞記事としては次のやうな事が記されてゐる。

「…………大阪某商人の一千圓喜捨の手紙や、奈良縣の材木寄附に關する手紙はだい自身で認め、村長をあざむき、新聞に出させて廣告に使つたものである。尚彼女や父の素行は芳しからぬ噂さあり、尼といふに有髮にして、內縁の夫あり——云々」

東京の一新聞を見たゞけで、この問題の眞相を掴まうとするのは大それた事ではあるが、一言したい。

私は敢えてだい女を辯護するものでない。事實彼女が詐欺的行爲以外に何ものをもなしてゐないとすれば、他の種々な罪惡と同視してもよい。

併し私の云はうとするのは彼女のその行爲の法律的及び

道德的解釋ではない。世の誤れる觀念と、彼女にまんまとしてやられた社會に對して挑戰したいのである。

第一、「社會事業をやるにふさわしい素行……」である。

一体社會事業をやるにふさわしい素行とは何であるか、如何なる種類の素行を指すのか、これは單に彼女丈に向つて吐かれる言葉ではない。私たちは日々世人の口からきく言葉であるが、曰く「彼は教師の癖に女に戯れた」曰く「彼は坊主の癖になまぐさだ」曰く「教師の癖に泥棒をやつた」等、等、

姦淫、なまぐさ、泥棒そのものが罪惡だとし、それを犯したが故に非難する事には賛成出來る。

只彼等がそれを犯したからといて彼等の場合丈特に重い罪惡になるいふ理由はない。彼等なるが故に特別な制裁を受ける理由は少しもない。

各人が各人の才能を信仰に應じて各の立場から仕事をやつて行くのであつて、特別に制定せられたる素行なるものはない筈である。

牧師も坊主も教師もその職業を除いては何ら一般と異るところのない人間である。戀する事も、なまぐさ生活をする事も、泥棒する事も他の一般人と異る事はない、故にそれに對する制裁は平等でなくてはならぬ。もし他の人間が貧乏のあまり、その他種々な事情の下にその罪を犯したからといふ理由を以て情狀酌量されるものなれば、彼等も又個人的な事情を以つて酌量されるべきである。だい女の場合に於ても同樣であるべき筈である。「あの婦人は單なる名譽心からやつた……」

私はだい女が單なる名譽心からやつたものとは思はない彼女は善人か然らずんば惡人である。單なる名譽心からやつたにしてはあまりに念が入り過ぎてゐる。あまりに選擇を極限しすぎてゐる彼女の名譽心を滿足させる事業はもつと華々しい誘惑の手を擴げてゐる筈である。大人げない名譽心からあぶない橋を渡る程彼女は愚劣な女ではない少くとも彼女の聰明さから云へば淺薄な名譽心からといはれ聽よりも詐欺だといつた方が、彼女を尊敬する事になる

「大阪某商人の一千圓喜捨、奈良縣材木寄附の手紙をだ

い女自身で認め……」だは、今日、現資本主義社會の商賣政策こしての廣告術を心得てゐるものならば、かゝる言葉を夢にも大聲で云ふを恥じる筈である。もしそれが事實としても、彼女の巧妙な廣告手腕に敬意こそ表はれ、詐欺的行爲だなどゝ今更仰々しく云ひ立てるのは笑止千萬である。

宣傳が幾分誇張に傾くのは已を得ないではないか。日々の新聞紙上に大文字を以て連れられた多くの廣告の中に厳密に云つてほんものゝ廣告が果して幾つあるかを想像せよひとりだい女のみかは！

「彼女及び父の素行には芳しからぬ噂さあり……」

彼女の系類に關する身元調査まで云々されては、彼女も實に浮ばれない。前科者の娘は生涯日蔭者で泣かなければならないこいふ理由はない。彼女の父の素行が彼女の事業の價値を低下せしむるといふ話は少々滑稽ではないか。

「尼といふに有髪にして、内縁の夫あり……」に至つては侮辱も甚だしいではないか。

尼には慾がないといふのか、性慾がないといふのか。

彼女が事業を放れて、個人として、否女としての生活を望むのに何の不思議があるか、

彼女が天形病院建設の美名にかくれて詐欺を働いたが故の悪名ならば、私たちといへども異存はない、併しそれにしても彼女の罪は罪として、彼女が尼の身分で髪を蓄へ、内縁の夫があるがためにその罪が一層重いといふ世評には輕蔑が免かれない。

社會人が大きい顔をして彼女を非難し得るのは彼女の詐欺的行爲のみ。彼女の個人的生活乃至彼女の趣味については何人も容喙するを許されない。

彼女が髪を愛し、内縁の夫を愛するは彼女の權利である恐ろしきものは、かゝる因習観念を群盲に植えつけた專制政治の社會制度であり。彼女にかゝる巧みな事業を起さしめ、ものゝ見事にからくりを覗かしめる隙を與へた資本主義の社會組織である。

而してだい女はその社會と群盲の前に血祭りにされた一個の存在である。（一九二六、八、二五、）



可惜しき郷里

伊福部敬

北國に特有か、生れた國と東京とより外は住んだことのない私には、どうかわからないけれども、何といふ澄明な奥深い秋空であつたことであろう。そこには煤煙の匂ひもなく、喧轟な雜音も反響してはゐなかつた。

九月、新らしい學期がはじまつて、久し振りに寄宿舍に歸つた晩、星空は更に澄み、更にかに。　言少い少女の心にほのかな鄕愁をよんだ。

十六の少女は、やはらかな菖蓿に座り、朗詠集を抱いてひたすらに感傷の涙をながした。或時は長恨歌を誦し、或時は一葉の生涯とその藝術にあこがれ、或時は詩集「異數の國の春」のもつ頽廢靡爛せる情緒に陶醉した。

何を讀み、何を考へ、そして何を生きればよいか、人生は要するに魅力ある謎であつた。彼女はよく胸のはりさけるやうな憧憬を焦煤になやんだ。けれども、濠の水は黒くすみ、城趾の石垣は百年の夢をたゝんで、眞葛の茂みだけが秋風に白い葉裏をかへしてゐた。その琥珀色の生毛をなでるそよ風の無關心さに一層に苛立つ彼女であつた。

「そんなにあせらないで、大きくなれば自然にわかり自然に道が開けて來ます。」

さう言つて、やさしく慰めて下さるのは鶴田先生、一葉全集の水の上日記の中の方である。彼女は此の先生から讀むことと考へることを敎へられた。

雨はしづかに降りつゞいた。雨が勞働者にとつて、主婦にとつて、農作者にとつて、どんなにいやなものであるかに關知しない少女は、雨をきらふことを知らなかつた。まことに絹糸のやうに眞直におちる雨は、物を思ふにふさはしかつた。

「こんな北國に住んでゐて、これ位の雨でテニスをやめたら、一年に何日お稽古する日があるんです？」

大きな聲で体操の滕吉先生に怒鳴られるまで、雨のこんなに降らない國が、他にあるとは知らなかつた。この先生には人生はテニスに始りテニスに終るのではなかつたらうか

雨の夜には、お濠の水の上をすれ〳〵に、螢火のやうな

光芒がとんだ。庭の草をむしると、長い髮の毛が指先にからまつた。それ等は、昔いつぱくさま(忠直卿か)になぶり殺された女達のさまよへつる魂である。こいふ語りつたへであつた。彼女等は、そのまゝをつたへのこして來た。
けれども北國に生れた少女の多くかが、それは知らない私は長じて物の本をよみ、南國の明るさと輕さを知つてから歸里をすてたいこ願つた。いつも陽の照つてゐるこいふ南國へ、冬も草りばきで歩けるといふ南國へ。

しかし、今も尙歸里の少女の心に、雨は好もしく木犀の香をこかして降つてゐるでらうか。それとも、それは私の心のふるさとに於てだけであらうか。

白い敎會堂が、濠にそうて立つてゐた。宣敎師の住居であるその裏手の門を入ると、玄關まで一面の草花の上に、漂白をかけて白い洗濯物が陽にひるがへつてゐた。彼女等は時々その應接室で英語のレスンをうけた。譯をつけて下さる通譯の丸毛さんの聲は、凉しく魅力にとんでゐた。胸につるした銀の十字架が、強い風にちん〳〵なつて、聖らかな夢を彼女らに織らせた。彼の人達の生活の、何と輕快に、しかもつゝしみ深く彼女等の目に映じたことか。

歸里をのこして十年、人生の裏町なる都會の陋巷に十年を住んで、何を彼女は敎へられたことだらう。そこには香氣を失つた人生と埃つぽい空とがあつた。そして彼女は北國に生れ　その父こ母が北國に生れ、その又父母が北國に生れ…………したといふことだけを敎へられたにすぎなかつた。鄕土をはなれ、傳統をはなれ、そして階級を無視して彼女は、いな人々は飛躍することも出來ないといふとだけであつた。

底石のみえる足羽川の淸らかな流れ、おだやかな足羽山
百年をねむる福井城の石垣、
あゝ、鄕里の空は澄んで雜音を反響しないでゐようか。それどもそれは彼女の心にうかぶ傷感のふるさとに於てだけだらうか。





油虫と朝顔

香月せき

コスモスホーセン花と朝顔と
半間にもたらぬ畑の中に
コスモスの家族が十本
ホセーン花の家族が七本
朝顔の家族が十二本
斯んなに大家内を小さな園藝家が育て〻います
コスモスはぐん〲よく育ちます
ホーセン花はコスモスの葉かげに育ち
朝顔は其下にいじけてちつとも育ちません

小さな園藝家は心配そうに
朝顔を他に植へかへておやりと私にたのみます
朝顔のひねこびた姿は私にもいじらしく感じました
朝顔の床にふさわしい日あたりのよいところを見つけましたので土を堀りかえて見ました
二くわ　三くわ堀りかへした時に
やわらかなドブ汁のふくんだ土の中に　一かたまりの油虫の家族を見つけました
私が入れたくわの音におどろいてちり〲ににげてしまいました
又一くわ入れた時　小さな油虫のかたまりが大きな母體にかぢりついていました
全身をなげだして幾十疋となき小さなものをジツと守つている姿
なんと云ふ貴い姿でありませう
無形の神の御手はかくも廣く深く暖かく働き給ふ
私には姿がぶきみでにほいがきらいであつた油虫でありました
けれども〲母體にかわりなき事を感ずる時　モウくわを入る〻勇氣が出ませんでした
私が土を元にかぶせるのを見て
小さな園藝家は私に尋ねます
私の語る言葉がよく解つて　おなじやうに土をかぶせてやりました
朝顔はやはりあたえられた畑に
油虫は土の下で育つています
コスモスもホーセン花も朝顔も油虫も
静かに平和に音なく生活をしています
小さな園藝家は
あまい食物をあたへ
おいしい水をそ〻いでいます
（小さな園藝家は私の子供）

ワッハッハッハー

重富ます

雨玉　コロコロ

葉ッぱに落ちた
青い家ちやとくる〱
見てた
やあ〱仲間
が澤山ゐるぞ
　「いいなあ
　　青い家だよ」
「こはいなあ
ゆれるぞ」
「こはいもんか
　ぶらんこ見たいだ」

風のおぢさん
いたづらもので
肩にかついだ
大きなふくろ
青い葉ッぱのお家に
むけりや
ユララ　ユララ　ユララ　ユララ
　「おうゆれるぞ」
　ユララユラヽユラヲ
「おッひどいぞ」
ビラビラビラビラビラ

「わッたすけて」
「ワッハッハッヘッ…」
こう〱皆な
おつこちたなあ
「ワッハッハッハッ」

眞夏の頃

山崎北術

坂下にむちのなる日をかなしとも馬
よ汝のいはぬさびしさ

こののどがカラ〱になる思ひする
夏くれば又海を忘れず

自がもてる望みを遠く思ひつゝすげ
なくもきく嫁のはなしかな

因習がもてくる大きなしみに嫁とり
の話し多くきかざり

ワシがなどふるさと言葉旅に出でき
きしことあり訛りなつかし

シカダニの夏にさまよひ我がプラン
語りしことの思ひでのよし

日本刀老ひしえかきの酒のめる日に
幾度ときゝしことかな

今もなほ家柄をこくかたくなの老ひ
しわかきの日本刀かな

東京へ走りて七日悄然とふるさとか
へり來し友のありけり

宗植眞よ汝がかたれる日本語のをほ
つかなさに涙さそはる

新刊紹介

婦人の書架

らいてう氏の「女性の言葉」を讀む

生田花世

「人が了解し得るは只、既に自分の中に存在するものに似通つたもの丈けである」

沈靜なる瞑想家アミエルがその日記で云つてゐるとほり人が人を了解し得ることには限りがある。而してそれは一面自分自身を語るものでさへもある。啓發に富んだ意味深き良書にむかふごきにいつも私はこのアミエルの言葉をおもひ出して恥多い氣がする。

今度平塚雷鳥氏の全集、もしくば選集ともみなすべき書が「女性の言葉」といふ書名のもとに教文社から新刊された。八百二十頁の大冊であつてその裝幀の清雅、肉筆の書名何れも好ましい近來の好著である。この書物こそは私の長いことその出版を鶴首して待つてゐたものであるので、私は溢るゝばかりの喜びをもつて迎へた。今こゝにこの書について語る機會を奥むめお氏により與へていたゞけたのは、光榮であると同時に、前にもいつたとほり私の了解の狹小がわざはひするかもしれないといふ杞憂がある。かつ、平塚氏の論文は所謂、平明に讀み去り讀み終り得る種の論調ではなくして、靜かなる思考をこちらに迫るものがある。從つて詳說するだけの準備が今の私には許されないのである。なほ氏の勞働問題に對する意見、社會改革及び新婦人協會時代の諸論文はこれを許すべく他にその人があるに相違ない。そこで私はアミエルの言葉にしたがつて、たゞ私だけの了解の範圍を青鞜時代にもつて行かうとおもふのである。それも概略的なものでしかないけれども私は「家を出るについて兩親へ」の一文にもつとも深い注意をそゝぐ、この文章の中にある氏の決意が——溫かい人間愛深窓の中にある一つのやむにやまれぬ新生の魂が、勇敢なる精神をふるひたゝして「どんなにた經路をこつて、どんなに發展してどんな處へ私を運んで行くものか、ごんな未知世界へ私の思想なり、生活なりがごんなに變化して行くものか一つ行き着く處まで行つて見よう」と戀

愛生活に身を進めて行つた決意のこの正しさにふるひ立つて古い殼を惜しげもなくすてゝ來た氏の精神、亂れざる氣魄の表白が、思ふにこの書のもつとも光輝あるところではあるまいか、勿論私は氏の習俗、形式を排する各方面への明せきなる論理の下に頭は下る。しかし私はより多くかうした大決意のもとに、かの古い時代において名實ともに新生の途をふみ、生きの甲斐ある生涯を、かの迷を無自覺の婦人によつてみたされてゐた時代に婦人の內外絕對の獨立者として、まづ身みづから、生活權より獨立とは同じみち乍ら眞正の獨立を至難たる環境より完全に、とげられたことに、又その心を表現された文章にこの書の多大の價値をおきたいとおもふものである。理屈のための理屈、議論のための議論には力が乏しいしかし氏はその內奧の要求の聲にきいて思考し、實行し、更に思考し、實行されてゐる。こゝがこの人の貴いところであり永く婦人界の先覺者として敬愛さるべき重大なるところであらうとおもふ。强く生きんとする世の多くの婦人たちにこの「女性の聲」を極力すゝめて無二の羅針盤として實にこの意味に於て私は辭をつくさうとおもふ者である

「社會經濟體系」所感

經濟學博士　土方成美

象を見に來た近眼の男が村の人を集め、象の鼻だけを描いて、象とはこのやうに長い丸太に似ものであると敎へ、躍起となつて人々の同意を强要したといふ小話がある。敎導される村の人々こそ實に迷惑である。卑近のこの譬のやうなことが常に形を變へて社會を擾してゐる。學者が自らの研究に熱心の餘り、一部を知つて、殘る大部分がどうであらうかを疑ひもせず、性急に一部を全部にあてはめて指導的態度で社會に臨んだり、現實には見向きもせず、假定を幾重にもおいて理論上かうであると現實に自說を强ひるのは、學問的にも社會的にも憎惡に値する宣傳文には常にこの流言的態度があり勝ちである。これ等が世間で、過激奇矯無智偏見的の名を冠せられるのは何れもそれが全部誤謬であるからではない。一部の眞理を餘りに手際よく全部に盛りすぎるからである。元來が美辭警句では納まらぬ地味な經濟學に、鳴物を加へ、文學趣味豊かに非人情な芝居をうたすことは愼まなければならない。知らず〳〵一派に偏した頭腦れだけをもつて學問的大系を作製し、世人に大系呼ばはりをすることは營業としては兎に角、學問上は許しがたい。

イントレランシーは無智無反省、非論理の表白である。日本評論社の今次の企ての社會經濟體系は、飽く

までも日本が持つ知れる限りを盡してその人の位置を指定してゐるが、極めてよき態度こあると思ふ。所謂「一流の大家」を網羅するこいふが、すべての執筆者が一流こいへるかは一般の判斷にまたなければならない兎に角よく網羅してゐるとは體系として空前である。二三年經濟學の書物を讀んだ人を直ちに、一流の碩學か何かのやうに吹聽する宣傳式講座とその選を異にするやうである。又到る所に「一流の大家」を引き廻して八面六臂の働きをさせるといふのではなく、各人のもつ特殊な立場と特殊な研究こを尊重してその位置に配するこいふのであるらしい内科に於ては一派の大家たる醫伯でも、歯醫者としては源水の方が上手であるかも知れない。學者こ並べて實際家に實状を語らせる計畫は離れ勝ちな學問と實際との連絡を計る上から見て實に自分等にとつて頂門の一針でもある。

自分もこの企ての意義多きを思つて執筆者の一人として參加するからには、乏しき自力を傾注して自らの位置を立て續けたいと思ふこの度は從來餘り顧みなかつた史觀の考察を重點にして歷史的變遷から社會經濟をながめて見やう。

この体系に多くの期待をかけるもの自分一人ではあるまい。なすべきこと多く忙しい今、徒らに同一事を蒸し返して生命の短きを嘆つまい。

右本系は東京本郷區弓町日本評論社から發行になります。申込期日は十一月三日まで。

―寄贈書籍―

女性の言葉（らいてう著）3.8圓
東京麹町區飯田町四ノ廿　教文社

公娼制度撤廢の是非（川崎正子）0.8圓
市外大久保百人町三六〇　婦人新報社

公娼廢止に關する善後策 0.2圓
大阪府社會課内　大阪社會事業聯盟

婦人參政審判の日（姫野総一）1.0圓
東京神田區小川町一　萩の家

二人と他の人

葵いつ子

×

――今日は歸宅致しませんが、どうか御心配なさらないで下さいませ。孰れ、詳しいことは後から申上ます――

二人は各の家に宛てたその手紙をポストに投げ入れる。

何だか親達に對して濟まない樣な、如何にも惡いことでもして了ツたやうな氣持ちに責められるし、其瞬間から逃げてゆく者だといふ世間狹い、今にも追手に捕へられさうな恐ろしさで、道行く人の總てに監視されてゐる思ひがする。

悦子の方が矢張り元氣よく、少し早い目に步いてゐる。

漸く停車場に着くと、發車までには一時間ばかりも間があつた。

「困りますね、まあこんなに待つては」

と言ひ乍ら、氣の弱い椿は四邊を見廻して、人の多い待合室で、若し知人に出逢つては困ると思つたので、外に出で、停車場の横に廻り、高い石垣の下に佇んだ。悦子もそれに從つてゐた。

細い切れ切なな糸が散らされてでもゐるかの如うに、秋の雨が降つてゐる。小鳥の模樣の紫の傘は椿、裏葉色に茶の縞の傘は悦子が翳してゐる。

二人の頭髪に飾られてゐる石、美しい細い指の石は光る。若い姿はより美しくまた輝く。

若し人が、此時此の二人が家出をするのだと知つたなら、夢の王宮から何にも知らずに彷徨ひ出るひとびとと思つて、吃度危うんで抱きとめるに相違ない。

地上の總ゆる幸福を貢がれて安穩に通すものとして、慈しむ親達に別れて、何を求めてゐるかを容易に諒解して貰いたい。

×

改札口を離れて雜沓の中を潛り出て列車に乘り込むと、人の少ない片隅に行つて二人は腰掛けた。

一分、二分、と何だか突然に追手が飛び出しさうな心配な時間を待つてゐるこゝ、遂々汽車は動き出した。

これつ切りで、故鄕は暫く見ない――兩親、妹、の顏、友達の事、二人とも手布で眼を掩つた。

「でも、これで安心しました、もう大丈夫」

「最初の第一步は成功してこれから先のことが」

「…………」

「私が思ひ立つたことなんですけれど、貴女にも濟まないやうだし、私の兩親や、誰に對しても濟まないと思はれて來ます」

「椿さんは氣が弱くて駄目」

「さうでした――一等良い生き方を考へたのでした、親達が自分の一生の法則としてゐたことを其儘私達にも負はせようとするのです。お花を活けたりお琴を彈いたりして、時代を少しも知らずに靜かに一生を費消させられては仕樣がありません。」

「新しい智識をどんなに侮辱したつて無理です、私達の若い時には、すつかり眞個の價値が見ゐるのです」

「買物の消費方法を手際よくすることだけで死んで了ふ女性でなく、正しい女性の型になる爲に親を離れてゆくのですもの、惡いことではありませんわ、それに、その型になつてから歸るつもりなんですもの」

「さうですの、親達は自分の思ひ通りにするのが私達に一等幸せなことだと思ひ込んでゐるので、全く自由を與へない。親達のこころに居ては、永久に舊日本の女性の型を守護するで木偶です」

「親を棄てるとか、新しい奇らしいことに憧れるものだとかいふ皮相な見方をせられるであらうといふことを考へる時、厭やな心持ちになりますね………」

「薄暗くなつて來ました」

「故郷から大分離れましたね、今頃、變つたことも無いでせうか」

「椿さん、今からそんなに仰言つて」

「でもそんな感情は動きます、それは覺悟は確かですわ、自分を完全にする迄は決して戻りません」

「灯火が見え初めました、農村つて方々に少し宛の家が並んでゐて淋しさうですね」

「あの灯火の一つ一つには、一家族が集つては樂しく御話をしたり御食事をしてゐることでせう」

「また家庭のことを思ひ出してお仕舞ひになりますの、それより、他の御話にしませう」

「ねヽ、でも日が暮れると淋しいのね」

「眞個、何だか私達丈けが何處とも知れない淋しい處へ運ばれてゆきさうにも思へますねヱ」

×

午後八時過ぎに、二人は或都會の停車場に降りた。雨は歇んでゐる。

騒がしい驛前の旅館には泊りたくもないので、當てもなく歩いた。

大きい橋の上に來る。二人は佇んで流れを見た。

「まあ濁つた水」

「御好きでせう」

「悦子樣と、いつか海へ行つた時御話したことがありましたね。都會の人達が濁つた大きい川だとか海岸だとかの樣子を書いてゐるけれど、信じられないつて」

「さうでした、こんなに濁るつて想像が出來ませんのね、」

「深刻な好い色、水は澄み切つてゐる田舍の町のやうな單純さでない、種々な靜かな濃い面白味が聯想されます」

河岸の家々を眺め、また、元來た道を振り返つてみる。黒い暖簾の掛つた店の前に結綿に結つた娘が派手な縞の前掛を掛けて立つてゐるのが大變形が好い。

「美の番人ね、あゝした氣分も悼いもの」

椿が言へば悦子もうなづく。

夜も更け易いので、急ぎ足で歩き始めたが、しつくり氣持ちの合ふやうな旅館は見當らない。

此處まで來れば、誰に呼びとめられる虞れもないが、明日から見知らぬ人の中に割り込んで行つて、どうして生活をするであらうかといふことが怖いやうにも思へる。

それでも二人は十九になつてゐる。吃度生活の力を持つてゐると考へる。その力をどうして發揮するかといふ事は判らないけれど、それは、直ぐ明日になつて事實に直面すれば判りさうに思はれた。

×

床の間の脇に「▲▲▲」こ俳優の名を書いた五寸ばかりの紙が貼られてある。
「この室には今迄この俳優が泊つてゐたのとみえますね、面白いこと」
「さうでせう、ね、あの紙を取つて貰つてをきませう、物語的な味があるから」
悦子は立上つてその紙を取る、そして元の席に歸つて椿と向ひ合つた紫檀の机の中央に、その紙を置く、椿は手に取つて愉快さうに笑つた。
二人はまた窓の側に行つて外を見る。神社の境内らしい處がすぐ下に見える、二階の室である爲に瞭りは判らないが、その神社の中の木立に降り濺ぐ雨が、しんみりして懐しまれる。
「私達はよりよい耽美、眞個の時代に遇つた耽美生活に入りませう」
「明日からですの」
其處へ女中が來て二つの床を延べて行つた。
「悦子さん、お休みになりますか」
「徹夜御話したいと思ひます」
「さうしませう。そして家への手紙も書きませう」
二人は書きかけては破つて、いつまでも手紙は出來上らなかつた。遂々諦めて明日書くといふことに定める。
「悦子様は妹さんがおありになつて好いけれど、私の兩親は、一人の子ですから今頃はごんなに悲しがつてゐるかも知れないこ思ふと胸が苦しくなつて來ます」
「理解出來ない人達の親切は全く迷惑ですわ」
旅らしい興奮に二人の眼は冴ゑてゐる。宿のうちもすつかり寢靜まつて小さい音も強く響くやうになる。
「悦子様、それにしても明日からどういふ方法で生きればいゝのでせう」
「何でも好いと思ひますは、少しの虛榮も持たない心算ですから」
「その何だつて好いつて、何と何があるのでせう」
「それは知りませんけれど聞けば好いじやありませんか、職業紹介所でゞも」
「でも職業紹介所はよしませうよ、家の方へ知れるかもしれないから」

「よしても宜しいわ、何處でも探しませう」

「私ね、汽車の中から急に心配になりましたの就職難といふことにならないかと思つて」

「あの就職難といふのは過分な望みを持つからじや、ないのでせうか、私達は何でも好いのですもの」

「さうね、それに若し無ければ、時計や指輪を賣れば當分の生活費はありませうから」

「え丶、私は他のことが心配になつてますの、保證人が要らないかといふこと」

「さうでしたね、そんなもの丶要らないのを探しませう。でも讀書したい、好い御友達と集つては勉強する方法があるものでせうか、」

「實際に當れば方法は考へつきませう」

「で明日の朝は、どうしませう。何處へ行つてみれば判るのでせう」

「そんなこと言つてみても判りませんは」

三時が過ぎると少し睡むくなつて來たので二人は床に就いた。

×

五時になると二人とも眼が覺める、明るくなるのを待つて洗面を終ゐる。

八時になり、九時になつて、それでも何處へ行つてよいかといふことは思ひ附けないが兎も角出掛ける。

空はすかり晴れてゐる。宿に傘を置いて高下駄の儘で歩るく。賑やかな商店街でも裏通りでも何處を歩いてもどの人も各の部署に着いてゐる。そして何處でも二人を待ち受けてゐて呉れないから、待たないばかりで無く、素氣なく一つの形式的な廻轉の如うに皆の人が一つの結合の中にあつて、二人丈けはその前で傍觀する運命が與へられてゐるやうである。

正午には、すつかり疲れて宿に歸つた、そして机に向つて郷里への手紙を書き初めた、

昨夜のやうに「大丈夫暮らせる」といふ安心が無くなつて心の半ば以上は家出をさへ悔ひてゐるが、それでも、——時代を知らない様な生き方をしたくありませんあのまゝ家にゐるよりもつとよい人間の型を見出して歸りますから、その日を御待ち願ひます——といふ意味を認める、書き上げて、二人は視線が合つたまゝ凝視しあつてゐるといつか泪ぐんで了つた、それでも感情に溺れてゐる暇さへもおしい焦立たしさを覺ゑて直ぐに再び外出する。(完)

社會問題全集豫約出版廣告

（一）
社會主義解說
古今東西の各種社會主義者と社會主義と與[illegible]語さがどんなものかが一目瞭然!

（二）
世界社會運動史
世界的事件さ世界的運動者さ世界的社會運動の事なら何でもわかる。

（三）
日本社會運動史
特有の材料で事件さ關係者さ道筋さを正確に詳しく面白く物語る。或は二冊とならん。

（四）
爭議の理論と戰術
革命か改良か急進か漸進か其原理原則手段方法（學說と事件の批判）を左翼の左巻右翼の右巻二冊にて說明す。

（五）
社會問題資料集
勞働組合農民組合水平社各種思想團體に關する特別の資料集

全集の特色と發行條件

▲上記全集（十一冊乃至十三冊）を本年十一月より配本を初め、來年九月迄に發行を完了す。

▲一冊四六版解放式二百頁以上四百頁以下也。（時に或は菊版解放式）

▲定價一冊一圓（送料二錢乃至十錢）全集全部一時の前納者は金拾圓（郵稅共）。

▲九月中の入金者には希望の下記解放群書一冊若くは解放（四六版なら一冊菊版なら二冊）を送呈す。

▲九月十日迄の申込者には別に本社の撰擇する前記一冊（菊版解放を除く）を附加送呈す（故に此場合は十五冊十五圓が十圓の割引となるやも知れず）

▲本集は新聞紙法により解放の特別號として發行するが故に最新最近最廉なるは勿論、雜誌的諸特長を有する最初にして最後のものならん。

解放群書

定價一冊一圓送代一冊拾錢

一 新居格創作集「月夜の喫煙」
▲モダンガールを描寫して劃時期的たる文壇貴重の創作集。

二 青野季吉文集「解放の藝術」
▼評界の爆彈論壇の明星、本書の出現はプロ文壇の大革命ブル文學への大地震。

三 プロレ諸大家「最近傑作選集」
▼プロレ派代表二十餘名の最近傑作集

四 山田淸三郎新聞征伐小說集「幽靈讀者」
▲裏面曝露に驚きたる大新聞社の買占に合はんとしたる有名の創作集。

五 山崎今朝彌文集「地震憲兵火事巡査」
▲宗一地藏、鮮人塚、龜戶祭、甘粕裁判の眞相記「甘粕は三人殺して假出獄？久さん未逐で無期の懲役！」は共貨名

六 現代大家「最近解放論文隨筆傑作集」
▲盡し雜誌解放半年分の合本にして貳百餘名五百頁の大著。再び得易からず。

七 山崎今朝彌創作集「犬の遠吠法律の惡戯」
▲絶版「辯護士大安賣」の改訂大衆版。

八 神近市子創作集「未來をめぐる幻影」近刊

九 本莊可宗論文集「解放の哲學」 近刊

（六）
社會團体の現状
勞働組合農民組合水平社青年同盟思想團體等の現狀現勢。

（七）
社會運動者年鑑
苟くも社會運動關係者の所屬團體思想系統略歷年齡住所趣味職業等手に取る如し。豫約者も亦右の報告を乞ふ。

（八）
社會問題法令集
通俗語にて必要なる註解と裁判例とを加ふ

（九）
社會問題解說
失業者問題婦人問題以下、以上に洩れたる一切の社會問題解說、大概二卷。

（十）
索引及總目錄
之れ亦本社獨特の考案に成る本集獨特のものにして便利重寶此上もなし。

▲從來の全集は例外なく衒學的裝飾品的のものたれば本集は之れを排して、極力興味中心實用本位の通俗簡明主義を採る故に紙質裝幀廣告の節約により定價を調節する事あるも、從來の裝飾的類似品の如く定價の爲に內容を調節すること絕對になし。

▲本全集は當代の奇才山崎今朝彌氏が無爲碌々半生を糊と鋏の裡に生活して獲得し其所藏せる數筒の大ち毀に山積したる材料に基き

▲現代のプラン大家新居格氏か一々之れを整理分類し仔細に之れを計畫立案し四時之れに配意傾注し

▲更に之れを其道專門大家の自由手腕に委囑して成りたるものなれば其眞價推して知るべし。

▲本集は一冊賣もするが、割引はない。

▲內容見本、規則書は作らず、豫約申込者は申込金を要しない。申込みはカンタンに端書で申込み、質問は一切往復端書の事。

四六版解放
定價一冊壹圓送料一部二錢

◎八月號　幸德秋水隨筆集

◎九月號　幸德秋水書簡集

◎十月號　新興消費組合の理論と實際

菊版解放
定價一部半圓送料壹部二錢

◎十月號　農民問題號　附農民組合現勢

◎九月號　勞動運動號　附勞働組合現勢

◎八月號　銷夏隨筆號　七月號發賣禁止

◎六月號　全誌女流號　以上之れを略す

▼爲替は「芝櫻田郵便局」本社は新櫻田町十九

▼振替（東京）は、三六九四四（解放社）二八一七二（上告專門所）二七七五二（日本フエビアン協會）三一三七〇（平民大學）何れも可。

東京芝區新櫻田町振東京三六九四四解放社

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
大正十五年九月二十七日 印刷納本
大正十五年十月一日發行 毎月一回一日發行

婦人運動

第四巻 第九號
（定價二十五錢）

